東方夢幻操

ソル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方夢幻操

【Ｎコード】
Ｎ５６９１Ｘ

【作者名】
ソル

【あらすじ】
幻想郷、それは東方好きなら誰もが行きたいと思う素敵な楽園。
その幻想郷に一人の青年が幻想入りしてダラダラグダグダと生活する、そんな話・・・

主人公情報（前書き）

能力ネタバレあり

それと能力説明が少し無理矢理感がある（汗）

変な所があれば指摘してくれると助かります

主人公情報

名前
芳乃　勇気　（よしの　ゆうき）

年齢
１８

種族
人間

能力
夢幻を操る程度の能力

主人公説明
東方大好きな典型的（？）な東方厨

現在進行形で絶賛ニートな野郎、能力が発現してからそれはますます酷くなるダメ人間街道まっしぐらな奴

よく心の中や現実で一人ボケツッコミをしている端からみたら大変頭がアレな奴

好きな東方キャラはフラン、橙、藍、椛、お燐など獣っ娘多め

能力説明
簡単に説明するとアニメ、ゲームの能力や技、自分で考えた能力や技などを創造したり操ったり出来るというテンプレなチート能力

だが主人公は基本的に楽に生活するために使っている

まさしく宝の持ち腐れである

第1話：いきなり！幻想伝説

・・・・・・ドシャ！

「ぐはぁ！？」

いきなりの全身を襲う痛みに寝ていた俺は跳ね起きた

「ゲホッゴホッ・・・一体何だよ・・・ってここどこ！？」

起きた俺の視界に写るのは木、木、木・・・３６０度どこを見ても木どう見ても森です本当にありがとうございましたｗ

「っじゃねーよ！何で起きたらこんな所に居るんだよ！？何、紫の神隠しで幻想入りとか？あったらいーね」

ねーよｗｗ

しかし昨日はちゃんと自分の家の布団で寝たよな？

なのに何で起きたら森に居るんだよ、さっきの痛みで夢じゃない事は分かるんだが・・・てかまだ痛ぇ（泣）

「しかもまだ夜じゃん」

そう辺りは真っ暗、周りも5メートル先が暗闇に包まれて見えないまさにお先真っ暗

「誰が上手い事言えと・・・しかしどうするか」

俺がこの先どうするか考えていると

「わは～、人間が居る～♪あなたは食べてもいい人間？」

・・・は？

突然ルーミアみたいなセリフが聞こえたので声の方に振り向くと

「・・・え？・・・・は？」

「わは～♪」

ルーミアが居ました・・・

第2話：ルーミアとの口渉戦（笑）

「わは～♪」

・・・え？ルーミア？
いやそんな馬鹿な
でも外見ルーミアまんまだしコスプレとかでもここまでソックリなのが居たらネットで一度くらいは話題になってるだろうし

・・・まさかの本物？
だとしたらここはまさか・・・！？

「なぁ、ここは幻想郷・・・か？」
「？そうだよ～ここは幻想郷だよ。ところでお兄さんは食べてもいい人間なのか～？」

確定、ここが幻想郷で目の前の子がルーミアだと
・・・それと同時に俺の命の危機ということも（汗）
ヤベェどうしよ、とりあえず口渉（誤字にあらず）で何とかしよう・・・

「あ～食べるのは止めておけ、俺ゴミみたいな味するみたいだから食っても不味いし腹壊すぞ」
「そーなのかー、じゃあ食べないのだ～」

ふぅ、何とか口渉成功、ルーミアがアホの子で良かったぜ

「よし、それじゃルー・・・あんたの名前は？俺は芳乃勇気」

あぶねぇ、うっかりルーミアの名前言いそうになったわ
一応幻想郷の事は知らないフリしとこう。さっきここが幻想郷か聞いちまったが多分大丈夫だよな（汗）

「私？私はルーミアだよ～」
「じゃあルーミア人里ってどこにあるんだ？」
「人里はあっちの道に出てあっちに真っ直ぐ行けば着くよ～」
「そうか、ありがとな。それじゃ俺は行くから」
「そーなのかー、それじゃあバイバイなのだ～」
「あぁ、またな～」

俺はルーミアに礼を言い教えてもらった道を歩き始めた・・・

第3話：能力覚醒（前書き）

サブタイでネタバレｗｗ

第3話：能力覚醒

ザッザッザッ・・・

「しかし本当にここは自然豊かで良いな～」

俺は今ルーミアから教えてもらった人里への道を歩いてる

「んー、少し急いだ方がいいか、まだ夜が明けてないから他の妖怪が出るかもしれないし」

と、俺が歩みを早めた時・・・

『グルルルル・・・』

前方に狼の妖怪が3体ほど、気付けば後ろにも3体・・・

計6体の狼妖怪の群れに包囲されていた

「フラグでしたか、そうですか」

コンチクショウ今日は厄日か！！

本日二度目の命の危機

さて、どうするか

戦う

口渉

逃げる

戦う、無理だｗｗ
口渉、ルーミアと違い今回は話が通じない
逃げる、包囲されてるから逃げられない

・・・あれ、これ詰んだ？（汗）

「グガァ！！」
「うわぁ！？」

ヤバいあれこれ考えてたら向こうから襲ってきたー！！
それを合図に他の奴らも襲ってきた！？

「うぉわぁ！のわぁ！にゃあー！？」
奇声を発しながら狼達の攻撃を何とかかわしていぐが

ガッ
「あ痛っ」
コケた・・・；；；
もちろん狼達はその隙を逃さない
俺に食い掛からんと一斉に飛び掛かってくる

「あ・・・」

その瞬間周りの時間がスローになる
そして産まれてから今までの記憶が一気に蘇ってくる

・・・これが走馬灯か・・・

ぶっちゃけ昔の記憶なんて興味無いが（笑）

そして走馬灯が終わりもうすぐ狼の口が俺の体を食い千切らんとその大口を開けた時

―夢幻を操る程度の能力―

ふと、頭にそんな言葉が浮かんできた

そして俺は自然とその能力を使っていた

「『結』！！」

その瞬間俺の体の周りが正方形の結界に囲まれた

『ギャン！！！？』

飛び掛かってきた狼達は当然結界にぶち当たり地面にズルズルと落ちていった

そして俺は

「おぉ～ぅ・・・」

周りの状況を見て呆然としていた・・・

第４話：戦闘？何それ食えんの？（前書き）

やはり短い・・・（汗）

感想とかアドバイス待ってますｍ（＿＿）ｍ

第４話：戦闘？何それ食えんの？

前回のあらすじ！

やせいの　おおかみのむれ　が　とびだしてきた！

ニア　にげる

にげられない！
おおかみのむれ　の　こうげき！
ゆうき　は　こうげき　を　かわした

能力覚醒！↑今ここ

……

「・・・今なら行ける！！」
正気に戻った俺は結界を解除し妖狼達に突撃して・・・

そのまま脇を通り駆け抜けていった

「能力ゲットしたのは嬉しいがまだ使い方がよく分からんから逃げる！！・・・という訳であばよとっつぁ～ん」

ゆうき　は　にげだした・・・

―森の出口―

「ふぅ、何とか逃げれたな」
森の出口までそのまま走りきった俺は道の小脇にあった岩に座り休んでいた

「しかし夢幻を操る程度の能力か」
さっきは咄嗟に結界を貼ったがつまりはそういうことなのか・・・？

―ズキッ！！―
「痛っつ！！」
何だいきなり頭痛が！？って何だこれ、能力の使い方？
なるほどテンプレ乙
だがこれで勝る！！
何にだよw
「というか頭がメチャ痛てぇ～！！！！」

…少年能力情報取得中…

「ふぅ、やっと痛みが引いた・・・」
しかしなるほどこりゃチートだな、自分で考えた能力とかも使えるのか

・・・二度目になるがテンプレ乙
「てか能力の名前と中身が合ってない気がするが・・・」
突っ込んだら負けですかそうですか

「よし！能力の使い方も分かったし体調も回復したからそろそろ行くか」
朝日も完全に上ってるし少し急ぐか・・・

・・・少年移動中・・・

第5話：俺、金無し、人里にて。（前書き）

４時間掛けて書いたのにたった２０００文字・・・
やっぱり長文書くの苦手だなぁ・・・

第5話：俺、金無し、人里にて。

―人里―

「やっと着いた・・・」

人里に着いたのはもうすぐ太陽が真上に行く頃だった

「とりあえずどっかの茶屋で休憩を・・・金無いじゃん・・・」

俺が人里の真ん中で項垂れてると

「おい君、大丈夫か？」

人里の人が心配したのか声を掛けてきた

「あぁ大丈夫です、ちょっと無情な現実に絶望してただけですから」

そう答えて声の主を見る

「？よく分からないが大丈夫そうだな」

声の主は慧音先生でした

まぁ何となくそんな気がしてたけど

「ところで君はここでは初めて見る顔だが外来人なのか？」

「あぁはい、そうみたいです。初めまして芳乃勇気っていいます」

「おっ近頃の若者にしては礼儀正しいな。私は上白沢慧音だ、この

人里の守護者や寺子屋の教師をしてる」

よろしくと手を差し出してくる
こちらこそと返して握手をする

「それで勇気はこれからどうするつもりなんだ？外の世界に帰りたいなら博霊の巫女の所に行けば帰れるぞ」

「いや、外の世界に帰るつもりは無いです。これからこっちで暮らすつもりです」

「そうか、外の世界に未練とかあるんじゃないか？家族も心配するだろう」

「まぁ、未練は一応はありますけどそれがどうでもよくなる位この世界はいい所ですから。家族に関しては・・・まぁ何とかなりますよ」

「何とかなるって、ハァ…まぁいい。ところでこっちで暮らすとは言ってたが住む所はあるのか？」

そういえば・・・

「慧音さん、ここら辺に空き家って無いですかね？」

「そんな所だろうとは思ったが、残念ながら今は人里には空き家が無いんだ」
あらら・・・（汗）

「そうですか、じゃあこれからどうするかな・・・」と、その時

…グゥ〜〜…

周りに聞こえるくらいの音量で腹の虫が鳴いた

無論俺のだ・・・

やっぱり周りにも聞こえたのか微かに笑いを堪える声が聞こえる

うわぁ、恥ずい・・・／／／

「ククク…何だ腹が減ってるのか。そういえばもう昼だもんな、よし蕎麦屋で昼飯にしようか…クフッ」

慧音さん、あなたもか・・・（苦笑）

「でも俺金持ってませんよ？」

「そんなこと分かっている、昼飯くらい奢ってやるから安心しろ」

「いやでも流石に初対面の人に奢ってもらうのは悪いですし・・・」

言ってて思ったがそういえば初対面だったね、一応元から一方的に知ってるからそんな感じがあんまり無かったな（苦笑）

「そんなこと気にするな。いいから人の厚意は素直に受けとる」

「あ・・・はい、分かりました。ありがとうございます」

分かってたけどやっぱり慧音さんいい人だ・・・（涙）

「よろしい、それじゃ行こうか」

…少年少女移動中…

―蕎麦屋―

「おっ慧音さんじゃないか、いらっしゃい！」

「こんにちは店主、席２つ空いてるかな？」

「おぅ、丁度そこの席が空いた所だ。注文が決まったら呼んでくれ」

「あぁ、ありがとう」

「流石に昼時だから混んでますね～」

「そうだな。まぁここは人里でもかなり美味い店だから人気もあるし私もよく来るんだ」

「へぇ～そーなのかー・・・」

「で、何を食べるんだ？私は天ぷらそばだな」

「じゃあ俺は・・・掛け蕎麦で」

「ん、掛け蕎麦でいいのか？こっちの山菜そばも美味くてオススメだぞ」

「あ、う～ん・・・それも食べてみたいですけど今日は掛け蕎麦でいいです」

「そうか。店主注文いいか？」

「はいよっ！」

…少女注文中…

「へいお待ちっ！天ぷらそばと掛け蕎麦ね！」

「あぁ、ありがとう」

「お～、美味そう・・・」

「さて、それじゃ食べるか」

「そうですね」

「「いただきます」」

ズルズル・・・

「おぉ、めっちゃ美味ぇ・・・！」

「ふふっ、だろう？」

「兄ちゃん嬉しいこと言ってくれるねぇ！そう言ってもらえると作った甲斐があるってもんよ！」

「あ、店主さん。これ本当に美味いです！一発で気に入っちゃいましたよ」

いやこれは本当に美味い・・・

「そうか、気に入ってもらえて良かった。まぁゆっくり食べていけ

よ！」
そう言って店主は奥に戻っていった

・・・・・・・・・・・・・

「ふぅ、ご馳走さま」
「ご馳走さまでした」
いやぁ～美味かった。あれから一言も喋らず黙々と食べてたからな～（笑）

「さてと、店主会計を頼む」
「おぅ、慧音さん今日は俺の奢りだ」
「えっ！？いやいやそれは悪いよ。でも何故？」

あれ？なんかデジャヴ

「何、兄ちゃんに美味いって、気に入ったって言われて俺は嬉しくてね。だから今日は俺の奢りだ」

「そうか。それならお言葉に甘えて、ありがとう」
「ありがとうございます！」

「おうっ！兄ちゃんもまた来てくれよ！」
「はい、絶対また来ます！ご馳走さまでした！」

・・・・・・・・・・・・・

「で、勇気はこれからどうするんだ？」

「？何がです」

「何って家だ、家」

「あ・・・」

完璧に忘れてた（汗）

「ハァ…それじゃ」

・・・それじゃ私の所に来る？・・・

「え？」

後ろから慧音じゃない人が声を掛けてきて振り返ろうとしたら

―フワッ―

と浮遊感がして咄嗟に下を向くと足元にスキマが広がっていて

「うぉわぁ～！？」

俺はそのスキマに落ちていった・・・

第5話：俺、金無し、人里にて。（後書き）

これ書いてたら蕎麦食いたくなってきた（笑）

第6話：マヨ☆ヒガ（前書き）

何かもうgdgdで滅茶苦茶（ー＿ー；）

小説書くのって難しい・・・↑

第6話：マヨ☆ヒガ

「うぉわぁぁあぁぁぁ～！？」

俺、只今絶賛スキマ落下中

スキマってことはこれは紫の仕業かー！！
まぁそれ以外に無いけど、てかまだ落ちるの？いい加減怖いんだがっ！？（汗）

光・・・やっと出れる・・・ってこれ大丈夫か？落下場所によってはヤバイ事になりそうなんｄ

「へぶっ！！！？」
とか考えてる間に無事落下（？）
しかし助かった、落下場所は布団か・・・
それでも結構な衝撃が来たが（泣）

「大丈夫かしら？」

と、スキマに落ちる前にも聞いた声

「えぇ、何とか・・・」
「そう良かったわ」
顔を声のする方へ向けると案の定スキマから上半身を出した紫の姿が・・・

「ってうおぉ！？」
ビビった～、予想はしてたがリアルで見るとマジホラーだよ（汗）

「クスクス、そんな反応されたのは久しぶりね」
「はぁそうですか、ところでここはどこですか？」
まぁ、大体分かってるが

「貴方も分かってると思うけどここはマヨヒガよ」

ん、何か違和感が・・・・・・！？
「え～と何故自分が分かってると思ったんですか？」
「惚けなくてもいいのよ、貴方が幻想郷の事を知ってるのはもう分かっているから」
・・・流石紫、最初から分かってたのか
「・・・そうですか、なら話は早いな。単刀直入に聞く、俺を幻想郷に送ったのは紫、アンタだな」
「えぇ、そうよ」

・・・って、あれ？

「やけにあっさり認めたね」
「バレてる事隠してもしょうがないでしょう？貴方もそうだったでしょうに」
「いやまぁ、そうだけど・・・」
「というか貴方口調崩れてるわよ、最初は敬語だったのに」
「あぁ、何かもう敬語使うの疲れたんで、そっちもこの方が良いでしょ？」
「まぁ、確かにこれから家族になるんですからその方が良いわね」

今なんと・・・？

「え、今なんて言いましたでざますか？」

「口調が可笑しくなってるわよ。家族になるって言ったの」
「え、なんでさ？」
「だって貴方、スキマに入れる前に言ったわよね、私の所に来る？って」

そういえば・・・

「確かに言ったけどそれとこれに何の関係があるんだよ？」
「貴方を気に入ったからよ♪」
「答えになってねぇ！！」
「別に良いじゃない、それとも他に行く宛でもあるの？」
ウグッ（汗）
「無いけど・・・良いのか？自分で言うのも何だが俺は引きこもりニートの駄目人間だぞ！（ドヤァ）」
「何でドヤ顔してるのかは知らないけどそこは調教するわ」

ヒィーー！！！？（汗）

「因みに聞くけど拒否権は？」
「あるわけ無いじゃない♪」
「ですよね～♪・・・はぁ～・・・」
「まぁ、安心しなさい。さっきの調教云々は冗談だから」
「だよね～、紫が言うと冗談に聞こえないから怖いわ（汗）」
「あら、名前で呼んでくれるのね。さっきまではあんただったのに」
「まぁ、ここに住むことは確定事項みたいだしね～」
「そう、良かったら紫お姉ちゃんって呼んでくれてもいいのよ♪」
「紫お姉ちゃ～ん♪（猫なで声で）」
「ごめんなさい、私が悪かったわ。」

フッ、勝った（ニヤリ）

「で、結局俺はここで何すればいいんだ？」
「別に何もしなくてもいいわよ。普段通りに暮らしててていいわよ」
なん・・・だと・・・
「紫の事だから酷い位にこきつかうかと思ったんだが」
「そんな事しないわよ。私を何だと思ってるのよ」
「スキマ妖怪」
「はぁ・・・もういいわ。皆に自己紹介するから居間に行くわよ、ついてらっしゃい」
「はいよ～」
そう言って紫はスキマから出て俺は布団から出て居間に向かって歩いていった

・・・てか今更だが紫に自己紹介してないな（汗）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5691x/

東方夢幻操

2011年12月2日01時53分発行